

イモ山さん粹にハガレ  
ンのエドをぶちこむだ  
け

刃燭崇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんでBLEACHとハガレンクロスが無いんですかね：  
まじ誰か書いてくれよ…

友「お前が書くんだよ！（言い出しつペの法則）」

ファツ!?ウーン…

てな感じで書き始めました。

ハガレンの設定を一部BLEACHチックにしてるかもしれません。  
あと作者のオサレ値が低いのでオサレにはならないかも。

取り敢えずイモ山さんの代わりにエドをぶちこむのを目標とします。理由？能力が

似てるから（適當）

まあエドならギャグもこなしてくれるでしょ（他人事）

目

プロローグ

二話 一話

次

11 4 1

# プロローグ

『やあ、久しぶり。オレに勝った後の人生はどうだつたかい?』

死んだ筈の俺の目の前に、「人の形をした何か」が居た。真理だ。この場所に来るのは四回目か。永遠に続くと思われる白い空間、もうここに来ることはないと思つていたが、やはり変化は無い。自分の後ろの扉の有無を除けば。

「最高に決まつてるだろ。お前が全知全能じやなきや俺の冒険譚を語つて聞かせたいくらいにな。んで、用件は何だ?」

そう言つて真理に目を向ける。

『まず、【真理の扉】がどういつたものか教えるか。これは世界が生まれてからの全ての情報が入つてるものだ。これはお前も【人体鍊成】の際に分かつてるだろう?』  
「ああ、俺も真理に触れたんだ。そんくらいは分かる」

『それで、人の記憶、経験もその対象になるんだ。それらは肉体的にではなく、精神的、存在を存在足らしめているもの、【魂】とでも言うべきものから手に入れることができ。そして、記憶や経験を抜き取ることで【魂】を初期化して、現世に【魂】を送り返

すんだ。謂わば、【真理】は輪廻転生をコントロールしている』

「それで？」

『全世界の住民は輪廻転生の鍵となる【真理の扉】を持つている。たつた一人を除いて』  
「……ツ！」

【真理】が、笑った

「じやあ俺はどうなる？輪廻の輪から外れるつてことか？」

『国家鍊金術師が答えをそんな速く他人に求めていいのか？まあ今回は教えてやろう。

自分の体を見てみろ』

そこには半透明になつた自分の体があつた。

「なツ……」

『お前がこの先どうなるか…またこの世界に生まれるか、それともこの世界から弾き出  
されるか、こればっかりは教えてやらん』

「オイツ！」

答えになつて無いじやねーか！

そう言う間にも俺の体は更に透けていく。

『人間が思い上がつた時、正しい絶望を与える存在…それが俺だ。本当に俺に勝つたと  
でも思つたか？』

「嘘ついてたのか！」

『なんてな、冗談だよ、俺に勝ったお前を少し茶化したくなつたのさ。まあ冗談なんて【真理】としては不適格だけどな。

それともなんだ、【真理の扉】が無いことが不安か？ 弟を助ける選択をしたことを後悔してるのであるのか？』

その言葉だけは絶対に見過ごせ無かつた。

「そんな訳有るかあツ！」

『だろうな。

じやあ行つてこい、エドワード・エルリック、初めての勝利者よ。お前ならどこに行つたつて、どうなつたつて大丈夫だ。何故言い切れるかって？ それは【知つて  
真理】だからだよ。

m』

その言葉を最後に、俺の意識は途切れた。

# 一話

「起きたまえ、そんなところで行き倒れられても面倒だヨ」

「つーッ！痛つてーッ！てめえ何しやがるツ！」

どうも日本刀の柄頭で叩かれたらしい。痛みが引く気配は無い。

「誰だお前！つてここはどうだ？」

その質問に思い切り顔をしかめられる。

いや、出会い頭に頭叩かれた俺の方がすべき顔だと思うんですけど（素）

「ここ」は戸魂界、その中でも殊更に治安の悪い更木地区だネ。そして私は君を此処へ送った死神と同じだヨ」

は？

「戸魂界？死神？アンタ見たいな個性的なファッショニのやつなんて見たこと無いぞ？」

【真理】じやなくてか？

「【真理】？何だその嫌な響きがする単語は？答えたまえチビ」

ピッキーン

「誰が蟻ん子短小クソチビ野郎だ！——センスファツション野郎にんなこと言われたく  
「搔き笔れ、疋殺地蔵」……」

体が：動かない！（即墮ち2コマ）

「サテ、ここからは体を動かすのを止めてもらうヨ私の質問に答えるときのみ、口を動か  
したまえ」

☆☆☆

「フム……死神に魂葬してもらつた訳ではなく、【真理】とかいう君から見れば高次生命体  
で、世界のあらゆる情報を蓄積できるシステム……と会話した後にいつの間にかここに居  
たと、これでいいかネ？」

「ああ、それより体動かせるよ「まだ自由な発言は許可していないヨ」……」

体の感覚はある……だが自分からの動きたいという情報伝達が上手くいっていない：  
一体どういう理屈なんだ……チツ

「そして……自分は元鍊金術師で……人体鍊成……いわゆる死者の蘇生……に挑戦したもののが失  
敗し、結果的にその鍊金術師としての力を失つたと……こんな話、私以外なら狂人と断じ  
て捨てるだろうネ」

そう語るクソダサファツジョンの死神とやらの目は爛々としていた。  
「なあ……ならなんでアンタは「何度言えば分かるのかね？」……」

口ではこういうものの、謎の力によつて俺の動きを止めるることは無かつた…がそのあふれでる狂氣と興味に思わず俺は自ら口を閉じた。

「馬鹿なことを言うネ、そんなの私が狂人だからに決まつてゐるからでないか」ギロリと、自称狂人の目がこつちに向いた。

「それよりもだヨ、君は何回その…「人体鍊成」に挑戦したんだネ？」

「一回だ」

「諦めた理由は？」

「真理】に到達したとき、人体鍊成をすることは不可能だと知つたからだ」その質問に答えたとき、先程まであつた「興味」が、明確に「失望」へと変化したのを感じた。

「やはり…君は馬鹿だヨ。腕一つ失つたくらいで、「真理」とやらに無理だと言われたらいで、そんなんで諦めてしまふなんて学者を名乗る資格は無いヨ。この世に完璧なものなんて無い。答えだつて複数ある。たつた一つに方法を絞り、それが無理と知れば諦める…学者の在り方としては決して認められない」

何でこんなやつに俺のことを否定されなきやならないんだ！

「何が…ツ！何がお前に分かるツ！父親も母親も居なくなつて、「君の心情は聞いてないヨ。それにもう…家庭問題は解決したんだ口？父親と再開することが出来、弟の体は戻

すことができた。もう終わつた話ダ」…

…

「話を逸らすなヨ、感情的になるあたり、君は馬鹿というよりガキの方が正しいネ  
狂人にここまで見透かされるとは…キンブリーとはまた違う、いや、プロセスは違う  
ものの「興味」のレベルが同じくらい狂気染みている…！」

先程言つたことは俺の本心ではあるが全てじゃない。母親を蘇らせるという目的か  
ら弟の体を取り戻すという目的に変わつただけだ。

だが：母親を蘇らせるということに関しては、確かに俺は諦めている：そのことにつ  
いてこの狂人は文句を言つているんだろう。

「オヤ、ガキに反応すると思つたけど、そんなことは無かつたようだネ」

「は？スルーしてたんだから一々蒸し返すなよ（怒）

「私は今、君の学者としての在り方について話をしている。君の持つていた技術や冒険  
譚、家庭問題なんて然程興味は無いんだヨ」

「君が始めて鍊金術とやらを学んだとき、それはどう感じたかネ？母親を生き返らせる  
為に研究を重ね、技術研鑽し洗練していく過程は君にとってどんなものだつたかネ？」

勿論、母親を蘇らせるという目的があつたが、弟と一緒に研究していく過程は確かに  
「…楽しかつた」

「そうかい。

：私は今、『被造死神計画』というのを計画している。要は人を人工的に作る計画だヨ。それを進めようとした折、『それは無理』なんてことを言われたらムキになつてしまつてネ。今までの無礼、本当にすまないヨ】

そりや自分がやろうとしてることをのつけから否定されたら頭にくるかもな。まあそれを察しろというのも無理な話だけど。

「そこでだ、私に君の人を造るという点での技術、経験、情報、失敗、全て寄越したまえ。私がそれらをお前より有効活用してやる。替わりにお前に研究者としての本分を、姿勢を、誇りを、成功を、そして楽しさを思い出させてやろう。さあ、この手を取りたまえ」もう体は動くようになつていた。

いや、それだけじやない。

自分が無意識のうちに諦めていたものに辿り着けるかもしねれない：

そんな、消えた蠟燭に火薬をぶちこむような、そんな熱が体の中を渦巻いていた。  
しつかりとその手を掴んだ。

「え？」

その瞬間、

肩に担がれて猛スピードで走り出した。

「ギヤアアアアアアアアアアツツツツツツ!!!!」

「うるさいヨ」

!!!!!!

「…」

ヤバいヤバい膀胱の筋肉も謎の力で止められてなければとつぐに漏らしてるううう

!

「そういえばお前、名前はなんていうんだネ？」

半ばグロッキーになりながら、なんとか質問に答える。

「元国家鍊金術師、エドワード・エルリックだ！」

「まるで西梢局の人間みたいな名前だネ。素性が 一々聞かれるのも面倒だ。

『江戸和陸』とでも名乗りなさい」

うわあ…ほほまんまじやん…ネーミングセンスねえ…

いや、それよりも

「アンタは！アンタは何て呼べば良い!?」

「私？私はこれから最も偉大な科学者になり、お前の上司にあたる、『涅マユリ』だヨ」

なんともまあ自信のあることだ。

「いやはや、豚箱を出てからこんなおもしろそうなガキを見つけるとはネ、中々幸先良いとは思わんかネ？」

「え…？」

その言葉に思わず心の声が漏れる

誰か助けてくれ！

不審な格好をした元犯罪者（もしかして脱走？）なマツドサイエンティストに体の不自由を奪われ誘拐されていまーす！

そんな俺の心の声は誰にも届くことは無かつた…

## 二話

揺れとスピードが収まつた頃、

「何やつてんスか。マユリさん」

と、パツキンのおにーさんが話しかけてきた。  
人一人扱いでる変なメイクのやつに平然と声をかけるとかさてはこいつも変なやつ  
だな？（名推理）

するとマユリが

「見て分からぬのかネ。そんな愚物が私の上司とは…さつさと消して私が技術開発局  
のトップの座に座りたいヨ」

と辛辣な一言

「どうせ実験台を拾つたとかなんかでしよう？ほらボク、住んでた地区まで送つて上げ  
るから、マユリさん降ろしてあげて下さい。危険視されてた人物がこんなちつちやい子  
さらつてくるとか大問題になるつスよ」

イラッ…俺のことを…「ボク」…？

「オヤ、じやあ自由にしようかネ」

そんな俺の感情が通じたのか、マユリがそう言つた瞬間体に力が戻つた。

いや、そんなことを考へる間も無く暫定マッドサイエンティスト2号に殴りかかつた。

「だあれが送り迎えまで親にやつてもらう年齢のおこちやまだあ！」

「シッシャイツ！」

左右のワンツーを繰り出す

「そ、まで、言つてないっス！」

しゃがみこみ左足で足払いを仕掛ける

「うおつ!?なんなんスかこの子!？」

態勢が崩れるどころに追撃…その瞬間煙幕に阻まれる。が、このタイミングで逃れる術は無い。そのまま抑えに掛けた。

「言つとくが俺は子供じや…」

「で、この子に何やつたんスかマユリさん。携帶用義骸の試作品が無ければ普通に負けましたよ」

俺の下でのびて居る怪しいお兄さんが後ろにも立つていた。ていうか剣先を向けられている。その事実に驚き、さつきまでの怒りは一瞬で霧散した。

最初から二人居たつてことか…？いや、目の前の肉体は生きてない。

ただ肉体がそこにあるというだけだった。

そんな俺の考えを他所に二人は会話を続ける。

「私は何もしてないヨ。面白そうなやつだつたから助手にしようかと思ったんだがネ、まさか新隊長様をここまで追い込むとは思つてもなかつたヨ。滑稽だネ、武器も持つていない彼に追い詰められるなんて技術開発局長の座を早く私に譲つた方が良さそうだネ」

「あなたの助手つスか：君名前は？」

「…エドワード江戸和陸だヨ、おい、さつき私が言つたことすら忘れたのかネ？」…「…、確かに俺が西梢局側の人間と思われると面倒…なんだつたか？いや、西梢局つて何処だよ、なんの単語も理解出来ないんだが。

「あなたに聞いたわけではないんスけどね…、で、マユリさんに唆されて私を襲つたと」「なんでもかんでも私のせいにしないでくれたまえ。君がこいつの気に食わないことを言つたからだヨ」

「あれ…？ 私なんか言つちやいました…？」

「ガキ扱いするとキレるんだヨ」

「え…？ そんな理由つスか…？（呆れ）」  
犯罪者の上司の顔がポカンとした。

おい、そんな顔すんなよ！まるで俺が低身長気にし過ぎてるみたいじゃねーか！

あれ？ そういうや何で俺の体縮んでんだ？ アルが体取り戻してから俺の身長も伸びて良い具合のイケメンになつたんだけど…

「まあほら、低身長氣にしてんなら伸ばせば良いじやないツスか？ 私は技術開発局局長、浦原喜助です。歓迎しますよ、ようこそ、技術開発局へ」

そう言われて手が差し出される

今まで家族のためや国のために研究し、技術を研鑽してきた…だけど今度は自分のための、自分が楽しむための研究をしよう

そんなことを考えながら差し出された手を取る

「よろしくお願ひします」

まずは自分の身長を伸ばす方法でも見つけるか！

---

技術開発局の一員になる…と決まつたが自分の能力がどれくらいか図るためのテストみたいなのが行われた。何でも真央靈術院とかいう学校やらの過去問らしい。

結果としては文系駄目の理系が満点といつた感じだった。

いや、死後の世界もまさか競争社会だつたとは…てか、歴史とか知る由もないんだよな…

「この…入局試験？みたいなのはやつぱ駄目だつたか？文系科目全部駄目だつたけど…」

「いやいや、重視すべきは理系科目つスからね、全然問題ないつス。しかしさか：理系の方は自分が作った問題とかもガツツリ混ぜたんすけどね…こうも満点取られるとは…」

どうも問題は無いらしい。その言葉に安堵する

「んじや、この紙に名前書いといて下さい」

「分かりました」

しかし、浦原さんと話してみたけど普通にいい人だわ。殴りかかつて悪かつたな…こんどお詫びでもするか：そんなことを考えながら「江戸和 陸」と記入する。やつぱこの名前安直だよな…

「それで配属なんスけど…」

「私が連れてきたんだ、私の助手にするのは当然だろう？」

マツドサイエンティストからは逃げられない（白目）

「で、マユリは俺に何をさせるつもりなんだ？」

「それを話すためにも私の研究室に連れて行こう。付いて来たまえ」

そう言つてマユリは同行を促す。軽く頷きながら後ろに従う。

いかにもな雰囲気の薄暗い廊下を通り、いかにもな雰囲気の研究室に辿り着く。そこには暗闇の中に浮かぶ薄緑色の液体で満たされた水槽があつた。

「これは……？」

『被造死神計画』それの二代目だヨ』

「色々聞く前に一つ質問しておきたいことがある……」

俺の生きてる頃、人体鍊成……謂わば人工的に人を造ることは禁忌とされた。何でかかるか？」

「まさか倫理的な理由なんて言わないだろうネ？……ああ、そう言えば代償があるのでたのかネ？」

「俺自身、最初はそう思つていた。人体鍊成を試みたら、例外無く何かを奪われる。そこに禁忌とされる理由があると思つていた。が、そうじやない。実際は『個人が軍事力を持たないようにするため』だそうだ。なあ、マユリは人を作つて何がしたいんだ？」

問い合わせた時、マユリは顔を伏せた。泣いて自分の正統性でも訴えるのだろうか：そんなことを一瞬でも考えた俺はマユリという男を分かつてなかつた。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

笑つたのだ。

どこまでも純粹で狂氣的なこの男は、涙や耳触りの良い言葉で取り繕つたりはしな

かつた。

ただ、嗤つたのだ。

「フー…いやはや、禁忌とするのも納得の理由だヨ」

ようやく落ち着いたのか、俺に話し始める。

「こんな問い合わせにすら答えられんとは…浦原のことを馬鹿には出来ないね。言われてみれば簡単な答えじやないか。全く恥ずかしい限りだヨ」

恥ずかしいとは言いつつもそんな様子を臆面に出さずこつちを向いた。やっぱこの人見た目も中身もオカシイ。

『何がしたいか』だつたネ。まず建前から言つておこうか。虚に対抗する戦力を多くするためだヨ。…ああ、そう言えば虚を見たことが無いのだつたネ。今度見せに連れてつてやろう。

それで本音だが：好奇心だヨ。分かつてたんじやないのかネ？」

「おそらくだが、陸の恐れるようなことは起きたりしないヨ。私にはお上に逆らう理由は（今のところ）無いからネ」

「改めて言おうか、私の研究に協力したまえ、代わりに研究の楽しみを思い出させてやろう。陸の言う『等価交換』だヨ」

「分かつた、これからよろしく頼む」

「まあここに契約書があるから逃げるなんてことは出来ないけどネ」

あ！それさつき浦原さんに言われて書いたやつじやん！何で俺中身確認してなかつたんだ…

「恒久的に…」とか「身命を賭して…」とか書いてあつてヤバいやつじやん…やつぱ浦原さんつてマユリの上司なだけあるわ…

そして…

マツドサイエンティストからは逃げられない（二度目）